

渡部昇一さんが亡くなった。私と渡部さんとの関係はライターと読者の関係です。最初に読んだ本が「パル判決書の真実」(3)でした。この時(2008年12月)の読書感を私の最初のホームページに載せてありましたので、以下にそのコピーを示します。私たちが、小中学校だけでなく高等教育の場でも、さらに社会人になってからも、続けて、マッカーサーの洗脳を受けてきたことが判りました。その後(2009年1月)やはり私のホームページには「日本は侵略国家であったのか」(4)という本の読後感を載せてあります。この本は渡部さんと田母神さんの対談形式で書かれていますが、この内容から、東京裁判史観は、現代の政府までも巻き込んで、身動きできない状態になっていることが判ります。

この時は、「こんなことがあって良いのか」と思いましたが、その後、韓国との間では慰安婦問題、中国との間では南京大虐殺事件問題、両国との間に靖国参拝問題等現在まで続いています。これらすべての問題について、渡部さんは正しく解説し、否定し続けていますが、問題は解決していません。渡部さんはいくつもの解決案も書いていますが、うまく行っていません。歴史を政治的に利用する場合、真実は関係ないということでしょうか。どうもそのようです。また、国際政治でなく、私たち、個人個人でも歴史観は違っています。

渡部さんは歴史の見方も教えてくれました。「渡部昇一の少年日本史」(7)には次のように書いてあります。

歴史とはなんだろう？ イギリスのバーフィールドという学者は歴史を「虹」に例えて説明しています。雨が降った後の空には無数の細かい水滴が残っています。この細かい水滴の一つひとつが歴史的事実なのだと思います。毎日の新聞に記録されているような事件ですね。でも、この水滴をいくら集めても虹にはなりません。ところが、この水滴の集まりをある角度から、ある距離をとって眺めると、はっきりとした七色の虹となって見えてきます。虹というのは不思議なものです。もっと近くに行ってみたいと思って近づきすぎると消えてしまいます。逆に、遠くに離れすぎても見えなくなります。今見えているのとは違う場所から見ようとしても、見る角度が合わなければ見えません。美しい虹を見るためには、適当な角度と距離が必要なのです。

この歴史観によれば、先の戦争の東京裁判史観も数々の占領政策の全ても細かい水滴と考えられます。一方パル判決書のような、これと逆の事実も水滴に含まれます。一方間違った報道や、真実と違う報道や政治判断などのうち、いまだ訂正されていない水滴は訂正することも大事であると考えます。最終的には、これらの水滴を見る者の考え(思想)によって、虹の見え方が変わってくるということになりますので、占領政策の洗脳教育は全く酷いものだったと思います。

これを是正するためには、憲法を改定して、再スタートするしか方法は無いように思います。

また、文献(6)の中にニーチェの言葉として「この世に事実はない、解釈のみが存在する」という紹介文がありました。哲学者らしい言葉で頭の中に残りました。

## 「パル判決書の真実」を読んで

渡部昇一さんの「パル判決書の真実(PHP研究所)」を読んだ。結論から言えば、私はこの本を読んで衝撃を受けました。

私はこれまで、私の生まれた昭和18年にまだ続いていた戦争は  
(1)日本帝国陸海軍が大東亜共栄圏の樹立、すなわちアジア覇権のために  
(2)天皇陛下を利用して、国民を扇動し  
(3)軍備の拡張を行い、アジアに進出をした  
(4)これを問題とした米英(連合国)が経済封鎖をはじめとする対抗策を行った。  
(5)資源の乏しい日本は石油を止められたら、戦争するしかなく  
(6)アメリカと戦争し負け、無条件降伏をした。  
(7)東京裁判により、戦争責任者7名が死刑に処せられた。  
(8)この戦争責任者を祭ってある靖国神社に、政府責任者が参拝することは、先の悪い戦争を肯定することであり、近隣諸国から強い非難を受けている。

私は昭和史について詳しく学んだわけではありませんが、これまでの人生で折に触れ、教えられ、頭に入っている内容は概略上記(1)~(8)です。

簡単に表現すると「日本は悪いことをした」または「日本は悪い国だった」原爆を落とされても仕方ない国であった。これを反省し、われわれは絶対平和を守らなければならない。だから平和憲法を守らなければならない。ということです。

東京裁判は11人の裁判官によって裁かれたが、この中でパル判事のみは、全ての罪状は無罪であるという判決をだした。この判決理由を書いたものがパル判決書です。そしてこの判決書の文章を引用しながら判りやすく解説しているのが「パル判決書の真実」です。

そして、この書を読んだ後では「パル判決書」の内容は「正しいこと」を言っているのだ、ということが判りました。パル判決書の内容が正しいということは「東京裁判」は間違っていたと言うことであり、前記(1)~(8)の歴史認識は間違いだと言う事です。間違いが判ったのに、多くの国民に知られていないのは何故か。私たちは何故間違った歴史認識を持つようになってしまったのか。これからどうするべきかなどについて渡部先生は詳しく解説しています。

歴史認識が変わると、靖国神社参拝問題も見方が変わってきます。戦争を起した責任者(A級戦犯と言われている)がA級戦犯ではなかったとなれば、誰が参拝しても誰も異論は言わないはず(宗教の自由の問題は除く)。

しかしながら歴史の事実は事実であり、政府がアジア諸国に対して謝罪したことは、日本は悪いことをした「悪い国」であることを認めている事になります。そう簡単にあの謝罪は間違っていましたなどと言うことは出来ないでしょう。どの政党でもそのように言っている政党は無いように思います。国際問題は本当に難しいと、思います。まともな国際ルールで行った裁判ではないようなので、このことが逆に裁判のやり直しなども出来ないと思います。

先日「日本は良い国である」というような論文を発表して、退職扱いになった偉い方が居りました。そしてその処遇などが不思議に思いましたが、この本を読んだ後では良く理解出来たような気がします。

最近の国際問題として、テロ問題、核拡散問題、などがありますが、これ等の問題に対する、関係国の対応なども、この本を読んだ後では、もう少し深く考えることが出来るようになりました。北朝鮮問題は拉致も関係するので更に複雑ですが、関係諸国が話し合いと平行して、経済制裁などを実施していること、主要関係国はすでに核を持っており、核実験も、ミサイル発射も行っているのに、核を持つことは悪いことといているのは、東京裁判で、欧米先進国がアジアを植民地支配したのに、日本のアジア進出を、悪いことと一方的に決め付けたことと似ているところがあるようにも思います。

私は65歳を過ぎて、会社生活も既に終了していますが、本当にまだまだ知らないことが多いと思います。そんな中で「ハル判決書の真実」をよんだことは、大変良かったと思っています。しかしながらこの本の意味は深く難しいので、これからも何回も読み直したいと考えています。

2008年12月

<http://www.015.upp.so-net.ne.jp...>

1/1 ページ

## 日本は侵略国家であったのか

2009年1月6日今年初めて本屋に行って「日本は侵略国家ではない」という本を見つけた。昨年12月に渡部昇一さんの「ハル判決書の真実」の感想を書いたときに自然と「航空幕僚長更迭の報道」が頭をよぎり書き留めた。

ところが、昨年末、この両者(渡部昇一、田母神俊雄)の共著として上記本が出版されていたのです。私は迷うことなくこの本を入手し、一気に読みました。この本には問題となった、田母神氏の懸賞論文の全文が載っていました。論文のタイトルは「日本は侵略国家であったか」です。短い文章の中に、日本は侵略国家ではなかったことを新しく公開された秘密文書や数多くの論文を、証拠としてわかりやすく書いています。アメリカ合衆国軍隊は、日米安全保障条約により日本国内に駐留している。これをアメリカによる日本侵略とは言わない。この文章が論文の書き出しです。なるほど判りやすいですね。もし、太平洋戦争をしなければ、日本は今でも白人国家の植民地になっていたかも知れないと記してあることが小生にとっては新しいインパクトとなりました。

また、太平洋戦争はコミンテルンが仕掛けたことがより具体的に記されております。このように新しい歴史的事実が明らかになって来ているのに、東京裁判史観が今も続いているので、日本人は愛国心を強く持つ国民とはなれない。国民に愛国心が無ければ、国を守ることは出来ない。領土問題も、拉致問題もなかなか解決の道筋が得られないのもこの間違った歴史観のためである。このために間違った東京裁判史観は捨てなければならぬ。日本は古い歴史と優れた伝統を持つすばらしい国であるという誇りを持つ必要がある。歴史を抹殺された国家は衰退の一途を辿るのみである。と締めくくっています。

私は正しい歴史認識を国民に浸透させ、諸外国にも正しいスタンスで交渉するために、既成の政党では無理であると思います。新しい政党を作るかまたは最近匂いのする、政界再編のときにしっかりした青写真を持った党が現れることを期待したい。田母神さんには是非政界で活躍して欲しいと思います。

2009年1月7日

渡部さんが亡くなったあとに、WiLL7月号増刊 追悼「知の巨人」渡部昇一 まるごと一冊 永久保存版(ワック出版)(8)が発売されました。この本には渡部先生と関係が深かった著名人や親族からの追悼文と、本人の(同誌への)寄稿文で満杯です。この中で何名かは、「渡部昇一著作・私のベスト3」を書いていました。渡部さんは生涯 800 冊を超える著作があるようです。この記事をみて私も書棚を見たら次のようなものが見つかりました (7)(8)は没後購入

以上記述したように渡部昇一先生は、私の歴史観(思想)に大きく影響した先生でした。文献(8)には渡部先生に国民栄誉賞をといた記事もありました。私もそのように思いますが、現在の日本ではまだそのような領域に達成していないと思われます。私の人生も残りそれ程長くはないと思いますが、渡部先生のお考えを引きついでいきます。先生のご冥福をお祈りいたします。

- (1)渡部昇一:日本とシナ、PHP、2006年3月30日第1刷
- (2)渡部昇一:パスカル「瞑想録」に学ぶ生き方の研究、致知出版社、平成18年4月6日第1刷(2006)
- (3)渡部昇一:「パル判決書」の真実,PHP、2008年9月9日第1刷
- (4)渡部昇一、田母神俊雄:日本は「侵略国家」ではない!海竜社、2008年12月29日第1刷
- (5)渡部昇一:中国を永久に黙らせる、WAC、2012年8月17日初版
- (6)渡部昇一:靖国を語る、PHP、2014年8月7日第1刷
- (7)渡部昇一:渡部昇一の少年日本史,致知出版社、平成29年4月25日第1刷(2017)
- (8)渡部昇一、他:追悼「知の巨人」渡部昇一,WiLL2017年7月号増刊 ワック出版